

令和 5 年 4 月 8 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00491

研究課題名（和文）ダダの詩学に関する研究 ラウル・ハウスマンにおける映像論と身体論を中心に

研究課題名（英文）A Study on the Poetics of Dada: Focusing on Raoul Hausmann's image and performance theory

研究代表者

小松原 由理（Komatsubara, Yuri）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：70521904

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ラウル・ハウスマンという芸術家を中心に、戦間期の前衛芸術運動に見られる諸々の発信の意図を、その難解な文字言語表現や思想哲学にのみ捕らわれていたこれまでの研究とは異なり、その身体論や映像論といった非言語的な追求の中であらためて捉えなおすことを試みた。特に越境性や他者性を獲得する場所としてのキャバレー芸術との密接なつながりや、写真や映画さらには文学の中で追求されていった、離心的知覚の拡張や獲得といった取り組みの中に、ハウスマンの芸術に対する総合的な理解を深めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ダダ、なかでもハウスマンを中心に分析し、その非言語的表現や作品としてみなされないものを集中して取り上げることで、あらためてヨーロッパの静的な芸術史観を刷新し、他者性と越境性に結び付いた表現がそこに模索されていたことが明らかとなった。このことの意義は二つあり、一つはその方向性は偏在性を主張するものとして決して区切ることができない運動であるという認識が得られ、今後は運動以後の継続性や発展が集中的に議論されねばならないことが明らかとなったこと。もう一つは、その本質的な脱ヨーロッパの越境性は明らかであり、言語を超えた非言語的表現の運動性への追求が、ますます重要な意味を持つことが示されたことである。

研究成果の概要（英文）：The previous debate about the aesthetics or poetry of Dadaism has been treated mainly through its difficult linguistic expressions and ideological philosophies. In my study of Raoul Hausmann, however, his verbal preoccupation with body theory and image theory was also considered important. I was able to deepen his very close connection to cabaret as a place of appropriation of transnationality and crossing borders and also his efforts to expand eccentric (exzentrisch) perception in photography, film and literature as a comprehensive understanding of Hausmann's art as well as Dadaism/Post-Dadaism in general.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：歴史的アヴァンギャルド ダダ キャバレー カバレット ポストダダ

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の着想に至った2018年はベルリンダダが誕生して100周年にあたり、ドイツ語圏においては20世紀初頭から第一次大戦後へと向かう最中に誕生した諸々の歴史的アヴァンギャルドと称される運動への回顧と再定義の気運が強まっていた。最も顕著な動きとしては、1916年にベルリンダダに先行して誕生したチューリッヒダダの100周年を機に動き出した様々な研究プロジェクトの存在であり、それらはこれまで маниフェストや言説中心に分析されてきた運動を別の角度から、より身体やイメージといった非言語的活動に関わる視点でアプローチするものであり、その方向性において、これまで見えては来なかった領域横断的な彼らの活動を貫く詩学の存在と展開が、より一層明確に示せるのではないかという期待であった。

### 2. 研究の目的

本研究では、上記のような背景のもと、特にベルリンダダの中心的人物であったラウル・ハウスマンによる映像や身体に関する論考や実践を手掛かりとしながら、ベルリンダダの言説的な営みのみではなく、非言説的営み 視覚音声詩の朗読やフォトモンタージュ、写真やポスターといった「イメージやアート」さらにダンスやリズム、観客を巻き込んだ朗読や身体的パフォーマンスに至る「身振りや舞踊」にも重点的に着目し、ダダの詩学を明確にしていくことを大きな目的とした。

### 3. 研究の方法

研究初年度においては、最近のドイツ語圏を中心としたベルリンダダ及びアヴァンギャルド運動に関する研究状況を把握するため、日本において入手できる資料をはじめ、現地アーカイヴへの訪問及び国際アヴァンギャルド学会への参加を通して、文献の収集を行った。翌年度は、初年度の文献精読によって検証したダダの詩学に対して、ダダ以降のハウスマンの創作の関係性を明らかにした。なかでも、ハウスマンの映像論と身体論は、彼が1926年からワーキングプログレスに進行させていったジャンル横断的な試みである物語『ヒュレ』で結晶化されている。ベルリーニッシュェ・ギャラリーのアーカイヴに保存されている『ヒュレ』に関する資料を再調査しつつ、『ヒュレ』の翻訳を進めながら、特にダダにおいてハウスマンが展開した映像論と身体論がどのような形で『ヒュレ』に発展し、それがどのような表現に結び付いているのかといった点を明示することを試みた。さらに完成年度には、本研究で得られた知見を国内外の研究者と共に共有し議論する機会を設けた。

### 4. 研究成果

研究初年度である2018年度はダダ及びハウスマンを中心とした関係する人物の文献調査及び、ドイツ語圏を中心とした関連領域における最先端の議論の把握の二つを基礎調査として行った。前者に関しては、ダダに関する当時のメディアの反応を集中的に取り上げたジューゲン大学での調査資料等入手し、さらにハウスマン自身に関して、ベルリーニッシュェ・ギャラリーで保管されているハウスマンの手記や、未刊の『ヒュレ』に収録されている映画に関するハウスマンの対話劇などが入手できた。後者に関しては、ミュンスターで開催された国際アヴァンギャルド会議に参加することで、現在進行形の歴史的アヴァンギャルド及びハウスマン研究の視座を得ることができた。また、初年度ではあったが研究の基礎段階をまとめ2018年度末には日本独文学会での国際シンポジウムにて、「ダダの新しい人間像及びそのハビトゥス」と題した研究発表を行うことができた。ハビトゥスと文学がテーマとなっていたシンポジウムではあったが、習性から解放され、知覚のレベルで再構想された、新たな人間像の提起という観点から、ダダの芸術家たちの詩学を捉えなおすという視点を提起し、会場からは一定の反応を得られた。

2019年度も継続してベルリンで調査を行うことができた。前年に国際アヴァンギャルド会議で知己を得たハウスマン研究者のエレーヌ・ティラール氏と直接会合をし、2020年度に日本でシンポジウムを開催するための具体的な意見交換を行った。また、この年の調査では、マグヌス・ヒルシュフェルト性科学協会のアーカイヴを訪問した。協会設立の貢献者であるマンフレート・ヘルツァー氏とラルフ・ドーゼ氏に、直接インタビューを行った。当時の先端的な性科学の知見に、ダダイストたちの詩学がどのような影響を受けたか、またヒルシュフェルトを含め、自然科学の領域と前衛芸術の領域がいかに緊密な関係を築いていたかが明らかとなり、より一層ダダの詩学を同時代的な動きの中で再度検証しなおすことの重要性を痛感した。この調査を経て入手できた資料をもとに、ダダの詩学としてのパフォーマンスティヴィティーに関する論考をまとめ、神奈川大学人文学研究所の叢書である『男性性を可視化する』(青弓社、熊谷謙介編、2020年2月)にハウスマンのダダにおけるモード論についての考察を寄稿することができた。

2020年度は、ティラール氏を招聘し国際シンポジウムを開催する計画を立てたが、新型コロナ

ナウウィルス的世界的感染拡大に伴い、全面的に中止となった。そのため、文献調査をさらに進める形で、2019年度に発表した叢書『男性性を可視化する』収録の論考「第2章 新しい男の誕生？ダダにおける「新しい人間」の masculinity」を発展させ、ダンディーという20世紀前半に新たな意味を担うようになった記号をキーワードとし、論考「踊るダンディー：フーゴ・バルとラウール・ハウスマンの舞踊と仮面」を成果としてまとめ、発表することができた。

2021年度は、中止となったティラール氏の招聘による国際シンポジウムの開催は断念し、オンラインでの開催へ向け、年度末に国際シンポジウムを計画したものの、直前に登壇者のコロナウィルス感染に伴う後遺症の悪化により、再びの中止となった。ただし、本研究の核心である問い「身体論と映像論の統合という視点は、ハウスマンの論考「人間カバレット」と、そのカバレット文化への具体的な関わりを探る論考「ベルリンダダのカバレットーラウール・ハウスマンのカバレット論をめぐって」に一つの結論をまとめ、成果として発表することができた。また、再度中止となったシンポジウムの代わりに、登壇予定であったパネリスト同士でオンラインのセッションを行い、2022年度の最終年度に向けた国際シンポジウムの有意義な準備を行うことができた。

2022年度は、いよいよ本研究の完成年度を迎え、かねてより計画していたハウスマン研究者のティラール氏と日本におけるハウスマンとかかわりの深い芸術家たちに造詣の深い研究者3名による国際シンポジウム「ラウール・ハウスマンとポストダダ～危機の時代のアヴァンギャルド～」を開催することができた。この国際シンポジウムを経て、改めてラウール・ハウスマンの大作『ヒュレ』の位置づけや特異性と、ダダの詩学の継承という意味でのポストダダというトパスへの注目を喚起する議論を展開することができた。本シンポジウムの成果は改めて論集として出版を模索している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小松原由理	4. 巻 58
2. 論文標題 ベルリン・ダダとカバレットーラウル・ハウスマンのカバレット論をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 113-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原由理	4. 巻 57
2. 論文標題 踊るダンディー：フーゴ・バルとラウル・ハウスマンの舞踊と仮面	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上智大学ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原由理	4. 巻 196
2. 論文標題 「崖っぶちの女の子」の楽園 エミー・ヘニングスのチューリッヒ・ダダ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文研究	6. 最初と最後の頁 1 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原由理	4. 巻 63
2. 論文標題 女性ダダイストの詩学 エミー・ヘニングスの文学と舞踊	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較文学	6. 最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原由理	4. 巻 122
2. 論文標題 ハンナ・ヘーヒ、ダダの女性批評家、あるいは哄笑する女ダンディ？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代	6. 最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松原由理	4. 巻 24
2. 論文標題 モデルネからアヴァンギャルドヘーカバレット「11人の死刑執行人」と若者たちの企て	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 非文字資料研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小松原由理
2. 発表標題 新しい女/新しい男の誕生? ダダイストたちのセルフポートレートとジェンダー
3. 学会等名 東京外国語大学総合文化研究所主催ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小松原由理Komatsubara, Yuri
2. 発表標題 Dada als Inszenierung eines neuen Menschen und eines neuen Habitus
3. 学会等名 日本独文学会蓼科シンポジウム
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 神奈川県人文学研究所、熊谷 謙介編 第2章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 288
3. 書名 男性性を可視化する	

1. 著者名 小松原由理編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本独文学会研究叢書	5. 総ページ数 87
3. 書名 アヴァンギャルドの運動表象	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

## 〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム：ラウール・ハウスマンとポストダダ～危機の時代のアヴァンギャルド ～	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------